

十、母はは

象形文字「両乳を加えた女の形」。女の字形に、両乳を加えた字形である。



母とは偉大なる生命の継承者である。人類の誕生以来、どれほど多くの母から子へと血を継承してきたのであろうか。自分は遡っても祖母までしか知らないが、母を通して脈々と命がつながってきたことは確かである。子のためなら、自分の命も投げ出せるような愛を越えた力を持つているのも母である。

自分のおなかに子を宿し、男には考えられない苦痛を経て出産する。父母の愛の結晶であることは間違いないが、母親が子を思う海のような深い愛は、父親にはない出産という苦痛を乗り越えてきているところにあると、男である私には思える。

アダムとイブは禁断の木の實を口にしてしまった。それ故に、母である女には出産の苦痛が、父である男には家族を養うための労働の苦が与えられたとキリスト教では教えている。昨今、女性は出産の苦だけ

ではなく、労働の苦も男性と同じように担うようになってきた。それが子供の数の減少の一因ともなっている。

それは、「より多くの収入を得て、より豊かな暮らしをしたいという欲望」の結果である。文明の発展と共に少子化の時代が訪れたといえる。

明治四十二年（一九〇九）生まれの母について、ここで書いておきたい。私の母は八人の子供を産んだ。二男、六女の八人である。六人の娘たちは、平均二人の子供を育てている。孫娘たちは平均一・五人の子供しか産んでいない。出産数の低下により、娘も孫娘も母に比べてその数は四分の一以下になった。

明治から大正、昭和、平成の時代を生きてきた、いわゆる明治の女である母は十九歳で嫁いできて八人の子供を育てたが、嫁いできたとき、父の妹と弟の四人が未婚であった。一番下の妹はまだ小学二年生の子供であったし、二人の弟たちも学生であった。その後、父のすぐ下の弟は農業専門学校でメロンの栽培の研究をする学生に、その下の弟はノモンハン事件に従軍する若き兵士であった。それから義弟二人は病死と戦死、二人の妹は結婚、祖父の死……八人の子供を育てながら。

また、家における諸慶弔事や子供の養育だけでなく、当時としては広い田畑耕作の全責任者でもあった。大きな農家にもかかわらず、父は若いころから外での仕事を続けていた。若いころには税務署に勤務。

戦後農地解放のことも絡んで勤めを辞め農家の戸主にはなったが、村の公の仕事を次から次と担うようになった。米作農地の拡大のために設けられた、西天竜農地改良事務所や、村の収入役、助役を務め、

村が市に合併すると、村の代表として支所長となり、その後は市会議員も四年務めた。

やつと公職から解放されたと思つたら、合併前の村の歴史を本にまとめる村誌編纂委員長に推され約七年。人生最後の仕事も公的な仕事となり家業である農業は母の手に委ねられ通したのである。父が公的な仕事を続けていたのは自分勝手や家庭を顧みないためではなく、周囲から推されることであると母は承知していたので、愚痴をいうことはなかった。

母はその間、一人一人の男衆を家に住ませたりしながら、農業の仕事の切盛りをした。二百俵近い稲作や、春、夏、秋の養蚕も昭和三十年ころまで続け、体の休まるときはなかった。結婚のときに持ってきた着物は、戦中、戦後の物のない時代にほとんど子供たちの着物や服に仕立て直された。子供のころ、冬に着た半てん姿の写真は、当時の暮らしをしのばせる。

子供心にも恥ずかしいなどとは思わなかった。周りの子供たちも皆同じだったし、暖かいものが着られるだけで嬉しかったのである。

文字通り「身を削って子を育てる」母の愛だっただと思う。だから、そのような貧乏な戦後の生活の中でも、八人の子供は一人もぐれたりせず素直に育つた。

父は七年ほどの苦勞の末、村誌『みすゞ』の刊行が終わると、人生における自分の役目が終わったといわんばかりに、七十四歳で亡くなってしまった。母はそれから三十年あまり、腰も曲がらず、子や孫や曾孫のことまで気にかけて元気に暮らしてきたが、平成十八年五月、何を患うことなく初夏の夕暮れどき、九

十八歳の天命を全うして静かに浄土に旅立っていった。

こんな母への思いは言葉ではいい尽くせない。激闘とも思える人生に草臥れ果てた様子もなく、針の穴に糸を通して、縫い物（ナプキンなど）をして楽しみ、できあがると作品を誰彼となく与えるのが楽しんでいた。教訓的なことをいうわけでもないが、そこに母が居るだけで教訓であり、愛であったと思ってる。世の母は、我母と同じようにときには自分を捨て、夫や子供や孫のために身を削っているのだと思う。やはり母の愛は永遠であり、計り知れない海のように深いのである。

父が亡くなってから母は庭園の見える南側の奥座敷で、縫い物をしたり、テレビを見たりしてゆつくりとした時間を過ごしていた。もちろん、部屋の隅にあるベッドで昼寝などもしていた。東京に住む私たちが家族は、盆、彼岸、夏休み、法事などの都度、母に会うのを楽しみに出掛けた。そんな折、母の部屋の床の間にはいつも同じ掛け軸が掛けられていた。子や孫に伝えたい自分の気持ち（人生観）をその短歌に託して伝えようとしていたのかもしれない。

世の中は何も言わずに伊予すだれ

その善し悪しは人に見えけり

自分の後頭部（母はボンドクドウといっていた）は自分では見えないので、他人に後ろ指を刺されない

ように自省して生きていきなさい……といつもいつていた。

その言葉と掛け軸の短歌は一致しており、これは母が我々子孫に遺してくれた教訓である。いろいろ教えてもかえって何にもできないことが多いので、この精神だけは持ち続けて生きていつてほしいという母心であったような気がする。